

平城宮西北部の調査

一第 646・652 次

1 調査の概要

平城宮西北部において個人住宅の建て替えにともなう学術調査を実施した。ここでは平城第 646・652 次調査について報告する。

2 遺跡の位置と環境

調査地は、平城宮の西北部に位置する。周辺では、奈文研による小規模な調査が実施されている（図 74）。第 646・652 次調査地の南を東西に通る奈良県道谷田奈良線に面した数次にわたる調査では、同一の場所に繰り返し掘り直された東西方向の素掘溝を確認している。このうち、第 174-17 次調査では近世～近代の溝を検出し（『昭和 61 年平城概報』）、第 164-21 次調査では近代の大溝の下層に土器や木簡を含む奈良時代の東西溝 SD12340 を確認しており、宮内東西道路北側溝の可能性が指摘されている（『昭和 60 年平城概報』）。

また、第 646 次調査地の西隣でおこなった平城第 642 次調査では、8 世紀初頭から 12 世紀初頭まで機能していたと考えられる東西方向の素掘溝 SD20311 を検出した。SD20311 は、第 164-21 次調査で検出した東西溝 SD12340 と同一の溝である可能性が高く、奈良時代を通じて機能した、佐紀池から秋篠川への排水を目的とした水路の一つと考えられている（『紀要 2022』）。

第 646・652 次調査では、SD12340・20311 の延長部分の検出が予想された。（桑田訓也・高野麗）

3 第 646 次調査

（1）調査の経過

調査に至る経緯 個人住宅建設にともない、遺構面の遺存状況の把握を目的として発掘調査を実施した。

作業の経過 調査期間は 2022 年 2 月 14 日から同年 3 月 4 日までである。2 月 14 日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこない、重機掘削を開始した。重機掘削と並行して、2 月 17 日に人力による遺構検出を開始。2 月 18 日に全景写真を撮影。2 月 21 日から実測を開始、2 月 24 日・25 日に全景写真を撮影。3 月 3 日に

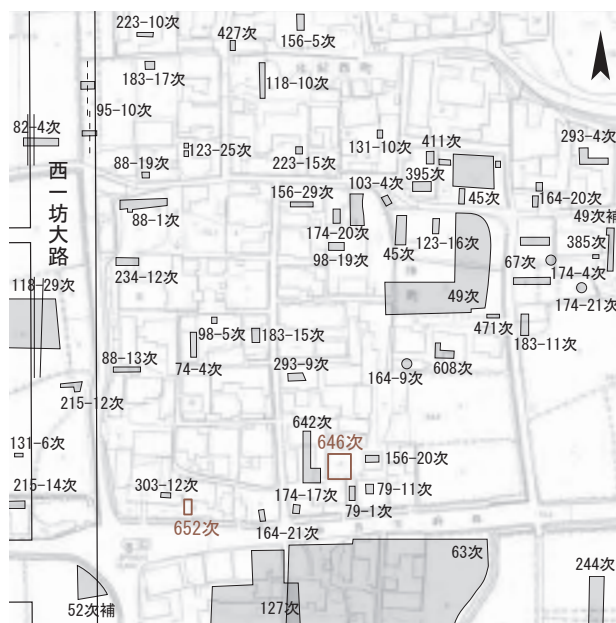


図 74 第 646・652 次調査区位置図 1：3000

遺構面保護のための砂を撒いた後、3 月 4 日に埋め戻しを完了して調査を終了した。

本調査では、発掘調査開始と並行して、出土遺物の洗浄・分類等の作業に着手し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

（2）調査の方法

調査区は東西 9 m、南北 10 m、調査面積は 90m²である。調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK-法で調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 を基本に平面図を作成した。標高は平城No 14（X = -145,153.672、Y = -19,244.829、H = 69.071 m）を基準として平城第 293-9 次調査（1998 年度）で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった¹⁾。表土および攪乱土、遺物包含層は基本的に重機で掘削し、奈良時代の整地土以下は、人力により遺構検出および掘削作業をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

（3）基本層序（図 76）

現地表から①表土・造成土（40～130cm）、②褐色砂質土（遺物包含層、最大厚 35cm、調査区西半のみ）、③にぶい黄褐色砂質土（奈良時代の整地土、最大厚 30cm）、④灰黄褐色砂質土（地山）。地山は北から南に緩やかに下がる。遺構検出は、③の上面および④の上面（ただし奈良時代の東西溝の周囲を除く）でおこなった。検出面の標高は 69.3 m（現地表下 70 cm）前後である。

（4）検出遺構

③層の上面では、調査区西南部で東西溝 2 条（奈良時代 1 条、近世以降 1 条）、調査区東部で土坑 3 基（いずれも平

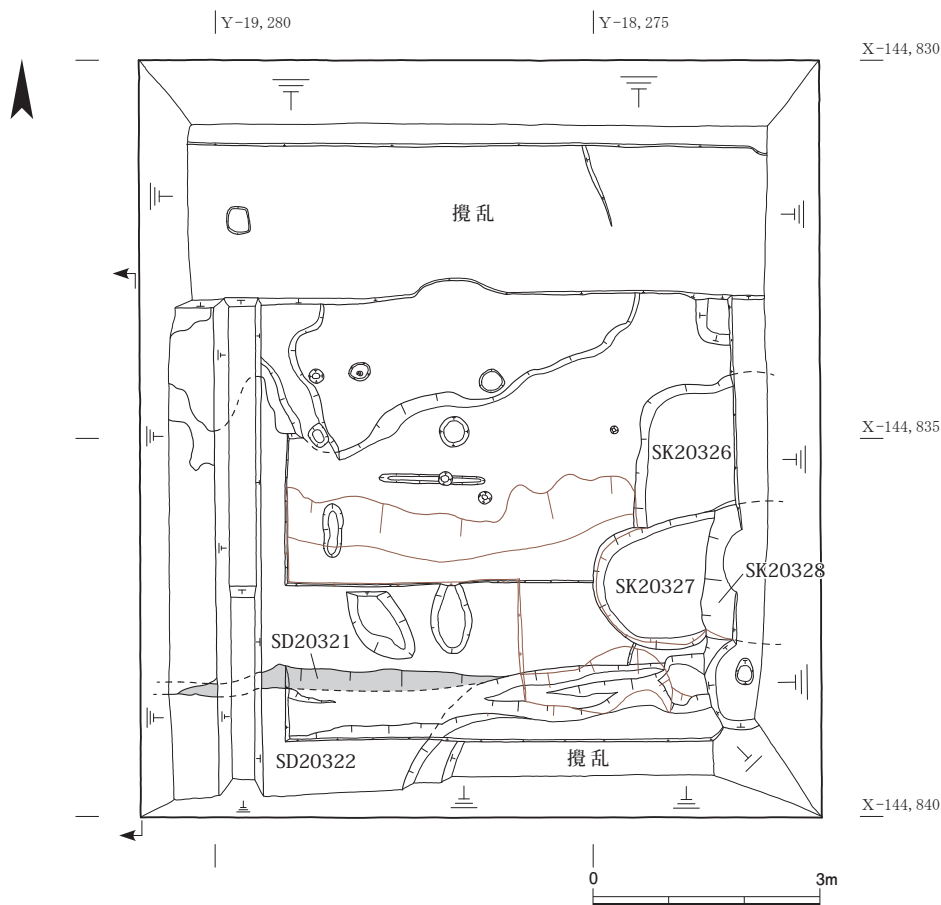


図 75 第 646 次調査区遺構図 1 : 100

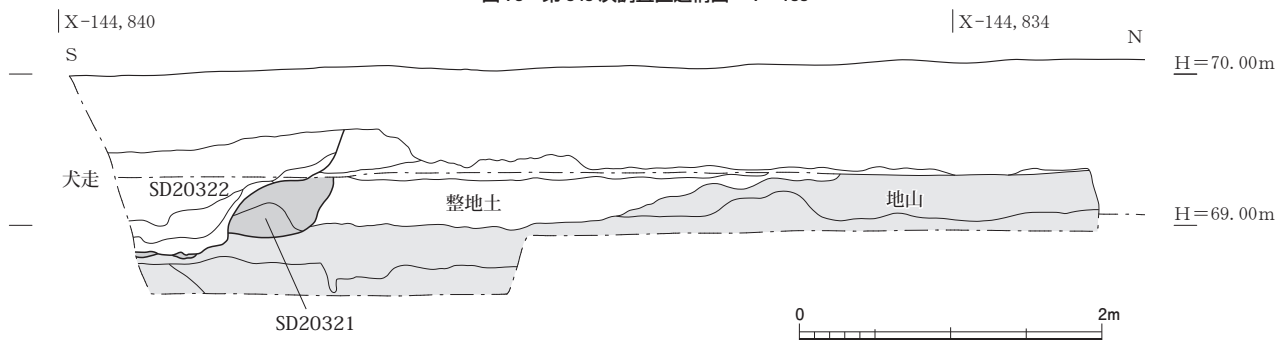


図 76 第 646 次調査区西壁土層図 1 : 50

安時代末頃)を検出した(図 75, PL.23-1)。④層の上面では、顕著な遺構は認められなかった。

東西溝 SD20321 調査区西南部で北肩を検出した。東西 3.5 m 以上、南北 1.5 m 以上、深さ約 50cm。西と南は調査区外に続き、東は攪乱に壊される。東西溝 SD20322 と重複し、それより古い(図 76)。出土遺物から、奈良時代の遺構とみられる。北肩が直線状でほぼ正方位に合うことや、遺構の断面形状、周辺の調査成果などからみて、東西方向の素掘溝の可能性が高いと判断した。

東西溝 SD20322 調査区西南部で北肩を検出した。東西 3.5 m 以上、南北 1.4 m 以上、深さ約 80cm。西と南は

調査区外に続き、東は攪乱に壊される。東西溝 SD20321 と重複し、それより新しい。北肩は直線的で、東でやや北に振れる。出土遺物から、近世以降の遺構とみられる。古代以来の落ち込みを踏襲している可能性がある。

土坑 SK20326 調査区東部で検出した。東西 1.7 m 以上、南北 2.0 m 以上、深さ約 25cm。さらに調査区の東に延びる。土坑 SK20327・20328 と重複し、それらより古い。埋土に瓦器を含む。

土坑 SK20327 調査区東部で検出した。東西 2.2 m 以上、南北約 1.7 m、深さ約 40cm。さらに調査区の東に延びる。重複関係から、土坑 SK20326 より新しく、土坑 SK20328

表 13 第 646 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6307	B	1	6641	F	1	伏間瓦	1
巴(近世)		2	近世		1		
時代不明		1					
軒丸瓦計		4	軒平瓦計		2	その他計	
		丸瓦			平瓦	磚	
重量		7.792kg			8.917kg	0.273kg	
点数		67			129	1	

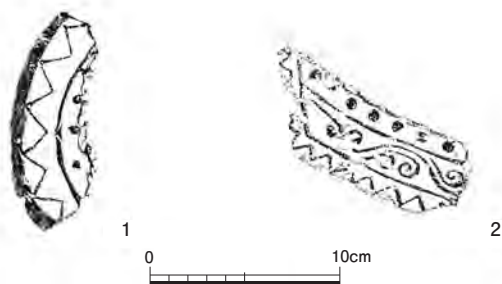


図 77 第 646 次調査出土軒瓦 1 : 4

より古い。埋土に古代の瓦を含む。

土坑 SK20328 調査区東部で検出した。東西 0.8 m 以上、南北約 1.8 m、深さ約 40cm。さらに調査区の東に延びる。土坑 SK20326・SK20327 と重複し、それらより新しい。出土した瓦器や土師器皿の年代観から、12 世紀前半ごろの遺構とみられる。(桑田)

(5) 出土遺物

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類は表 13 のとおりである(PL23-2)。軒丸瓦は 4 点出土した。図 77-1 は 6307 型式 B 種。平城瓦編年のⅢ-1 期で、これまで平城宮北面大垣付近や宮内の西北部で比較的まとまって出土している。そのほか近世の巴文瓦が 2 点、時期不明のものが 1 点ある。軒平瓦は 2 点出土した。図 77-2 は 6641 型式 F 種。頸部は貼り付け削り出し段頸で、頸幅 5.5 ~ 6.0cm。藤原宮式である。そのほか近世のものが 1 点ある。

道具瓦では、近世とみられる伏間瓦が 1 点出土した。丸瓦は 67 点(約 7.8kg)、平瓦は 129 点(約 8.9kg)が出土した。丸瓦にはほぼ完形の個体が 1 点ある。全長 39.4cm、玉縁部の長さ 5.7cm、広端幅 14.8cm、厚さは 1.2 ~ 1.5cm。狭端側の側縁には部分的に分割破面が残る。

磚は 1 点(約 0.27kg)が出土した。完存する辺がないため本来の大きさは不明である。(川畑 純)

土器・土製品 調査区からは古代から近代の須恵器、土師器、瓦器、陶磁器などが整理用コンテナにして 1 箱程度出土した。西排水溝からは奈良時代の土師器甕片や須恵器杯 A・杯 B・皿 B などが出土した。図 78-1 は、褐

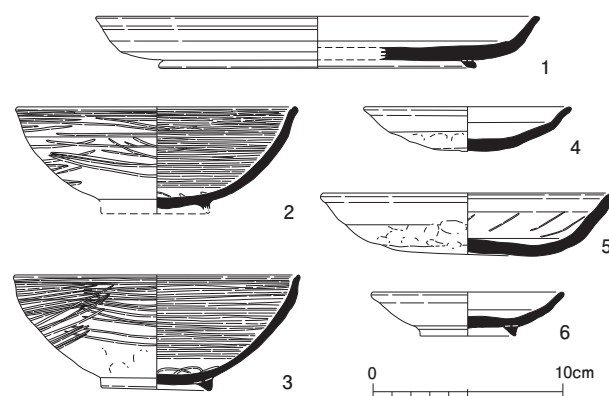


図 78 第 646 次調査出土土器 1 : 4

色砂質土層から出土した須恵器皿 D。奈良時代の須恵器供膳具のなかでも希少な器種である。SK20328 からは 11 世紀前半(大乘院編年Ⅱ-A 期)²⁾の土器が比較的まとまって出土した。図 78-2・3 は川越編年第Ⅱ段階の瓦器碗。図 78-4・5 は大小の土師器皿。5 は内面にコテのアタリが観察できる。6 は高台付きの皿で、平安京の白色土器に類するものであろう。4 ~ 6 はいずれも白色を呈し、この時期に特有の胎土である。(神野 恵)

4 第 652 次調査

(1) 調査の経過

調査に至る経緯 個人住宅建替えにともない、遺構面の遺存状況の把握を目的として発掘調査を実施した。

作業の経過 調査期間は 2022 年 10 月 24 日から 11 月 7 日までである。10 月 21 日に基準点測量および調査区の設定、レベル移動をおこない、10 月 24 日に重機掘削を開始した。重機掘削と並行して人力による遺構検出を開始し、10 月 26 日に全景写真撮影をおこなった。平面図と壁面土層図を作成した後、サブトレンチを設定して地山を確認した。10 月 28 日に掘削作業と遺構検出作業を終了し、10 月 31 日から遺構面保護のための砂を撒いたのち、埋め戻しをおこない調査を終了した。出土した遺物は発掘作業終了後に洗浄・分類・註記作業を実施したのち、主要遺物について実測図化作業をおこなった。

(2) 調査の方法

調査区は東西 3 m、南北 6 m、調査面積は 18m²である。調査では、GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK 法で調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 を基本に平面図を作成した。標高は平城 No. 14 (X = -145,153.672, Y = -19,244.829, H = 69.071 m) を基準として平城第 293 - 9 次調査(1998 年度)で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった³⁾。造成土、旧耕作土、床

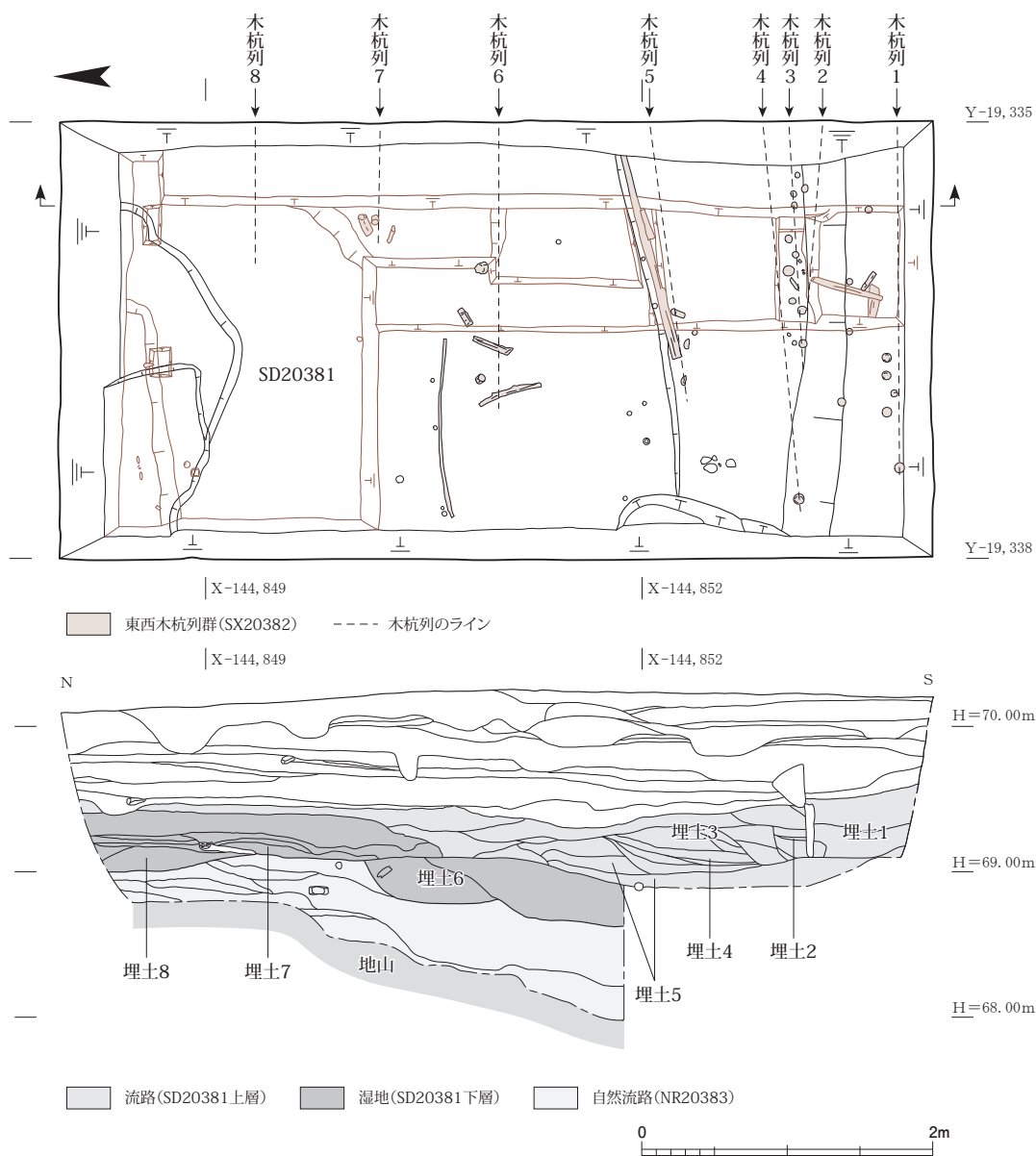


図 79 第 652 次調査区遺構図・東壁土層図 1 : 50

土は重機で掘削し、床土下部以下は遺物の包含状況を観察しながら一部重機での掘削をおこなったが、基本的には人力により掘削および遺構検出作業をおこなった。その後、サブトレンチを設定し、地山上面まで掘り下げた。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

(3) 基本層序

層序は、上から①造成土(30～60cm)、②旧耕作土・床土(20～30cm)、③湿地および流路 SD20381 の上層埋土である灰オリーブ粘土(砂混じり)および灰～灰黄砂(5～60cm)、④湿地および流路 SD20381 の下層埋土である灰オリーブ粘土(砂混じり)(20～50cm)、⑤自然流路 NR20383 の堆積土である灰オリーブ粘土(20～95cm)、⑥青灰粘土(地山)である(図 79)。③・④層は、それぞれ上層と下層に分けることができ、各層の下部には砂が堆積し、層位は北か

ら南へ向かって高くなる。遺構検出は、③層と④層の上面でおこなった。遺構面の標高は 69.3～69.5 m である。

(4) 検出遺構

調査区全体で湿地および流路 SD20381、東西木杭列群 SX20382、自然流路 NR20383 を検出した(図 79, PL.24-1)。

湿地および流路 SD20381 近世以降に埋め立てられたと考えられる湿地および東西流路である。調査区全体に広がり、検出面からの深さは最深部で約 70cm である。北岸は調査区西北部で検出したが、南岸は調査区外にあるとみられ、全体の平面規模など、その全容は不明である。

埋土は北から南に向かって堆積している。埋土の粒度は南にいくにつれ大きくなり、上層の埋土 1～5 は砂あるいは砂質土で、下層の埋土 6～8 は粒度がより小さく、より粘性の強い粘砂土あるいは粘土となる。南側の埋土

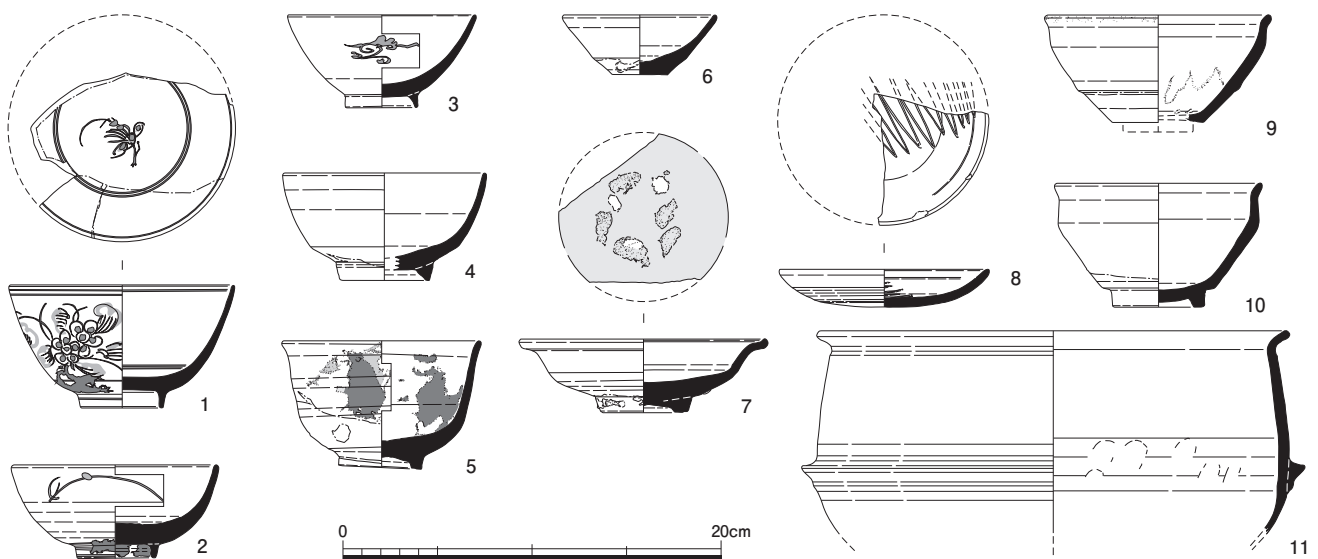


図 80 第 652 次調査湿地および流路 SD20381 出土土器・陶磁器 1 : 4

1～5 は比較的流れの早い流路の埋土であった一方で、北側の埋土 6～8 は、湿地あるいは流れのゆるやかな流路の埋土と考えられる。埋土から近世の遺物が出土したため、いずれも近世以降の堆積である。また、調査区北壁では、土層の観察により、埋土 6 の上層で稲とみられる植物根の痕跡を確認した。さらに、調査区東壁で確認した埋土の切り替わりの位置に対応して、後述の東西方向の木杭列群 SX20382 が打ち込まれている。

また、近世の絵図では、調査地一帯が水田とされる⁴⁾。本調査地は、元々は湿地あるいは流路だったが、調査地の北側にあった既存の水田を南へ拡張するために、湿地あるいは流路を人工的に埋め立てた際の埋土が埋土 1～8 であると考えられる。また、埋立土の各層の下部には流水に伴う砂が堆積している。そのため、各段階の埋め立て後は埋立土の南側を水路として、水田耕作に使用していたとみられる。

東西木杭列群 SX20382 SD20381 上で東西方向に並ぶ木杭列を 8 条検出した。木杭列 5・6 の北側では、それぞれ直径約 5 cm、長さ約 1.5 m の横材とみられる丸太状の木材を 1 本、直径約 3 cm、長さ約 1.3 m の横材とみられる竹材を 1 本検出した。これらは、縄状の有機質で木杭の北側に固定されており、木杭と併せて柵状の遺構を形成していたとみられる。木杭の打ち込まれた層の上面は北から南へ徐々に標高が高くなるとともに、木杭によって形成される土留めがその北側の層よりも層位的に上位になることや、木杭の遺存状況は南側の方が良好であることから、木杭列は南にいくにつれ年代が新しくなるとみられる。水田を南側へ拡張する際に、木杭の北側を一

段高く造成し、南側を一段下げて排水した際の土留めおよび護岸に使用されたものとみられる。また、SD20381 の埋土に近世以降の遺物を含むことから、SX20382 も近世～近代の遺構であると考えられる。

自然流路 NR20383 SD20381 の下層で検出した自然に形成された湿地状の流路あるいは湿地と考えられる。調査区西北部で北岸を検出したが、南岸は確認できず、平面規模は不明である。また、サブトレンチにより、調査区中央付近で深さが約 95 cm であることを確認したが、それより南は安全確保のため地山上面まで掘り下げていないことから、深さは明らかでない。埋土に近世以降の遺物を含むことから、近世以降に埋め立てられたとみられる。
(高野)

(5) 出土遺物 (PL24-2)

土器・土製品 調査区からは整理用コンテナ 2 箱分の土器・陶磁器が出土した。なかでも湿地および流路 SD20381 からは江戸時代後半頃の陶磁器、土釜、すり鉢、瓦質土器などがまとまって出土した。

図 80-1～3 は肥前系の染付碗。1 は丸みを帯びた深手の染付で 18 世紀頃のもの。やや黒みを帯びた絵付けに、釉薬は白みがかった乳白濁色を施す。2 はやや器高が低い碗で、見込を円状に釉剥ぎする。3 は小型の染付碗。外面 3 ヲ所に呉須で雲文を描く。4～7 は 17 世紀頃の唐津焼。いずれも明橙色の素地に透明感がない灰緑色の釉を漬け掛けする。4・5 は碗で、4 は胴部の下方に稜線をもつ。6 は平らな底部から直線的に口縁部が開く小碗で、底部外面に糸切りの痕跡を残す。7 は口縁端部が強く外反する折縁皿で、見込みに釉はげと目あとが残

る。8は内外面にオリブ色の鉛釉を施した土師質の皿。内面にジグザグの篋書きを施す。灯明皿であろうが、残存する部分に灯火痕は確認できない。9・10は17世紀の瀬戸美濃の天目茶碗。11は土釜。口縁端部は短く外反するだけで、肥厚しない。鐙は水平に短く引き出され、鐙部の下に突線が巡るなど、北和地域では珍しい器形をしており、他地域から搬入された可能性が高い。外面全体に煤が付着し、内面は鐙より下の部分にとくに暗褐色の光沢がある使用痕が残る。(神野)

瓦磚類 古代から近世にかけての丸瓦16点(約4.4kg)、平瓦85点(約12.1kg)が出土した。いずれも細片で、本来の大きさや製作技法等の詳細は不明である。また、磚2点(約1.1kg)が出土した。そのほか、軒瓦や道具瓦等も確認できなかった。(川畑)

木製品 漆塗椀2点、加工板2点、組み合わせ部材1点が出土した(PL24-2)。漆塗椀はともに外面は黒漆塗、内面は赤漆塗である。1点は外面に「丸に三つ引き」文様の痕跡がある。底面には高台をもつ。高台付け根から少し上の位置に稜線があり、そこから器壁が緩やかに立ち上がる一文字腰椀である。復元径9.6cm、器高3.9cm、高台の高さ0.4cm。横木取り。NR20383出土。もう1点は漆塗椀の口縁部付近の破片で、前者に比べて器形が扁平で蓋の可能性もある。長さ3.9cm、幅5.1cm、厚さ0.6cm。縦木取り。SD20381出土。

細長い加工板のうち1点は上端、下端ともに切断される。横方向に緩やかに湾曲し外面2箇所には横方向の圧痕が観察できる。圧痕は^{たが}箍の痕跡と考えられ、樽あるいは結物桶の側板と考えられる。長さ29.8cm、幅4.7cm、厚さ0.7cm。板目。NR20383出土。もう1点は上端、下端ともに切断される。下端の両側辺部分には、それぞれ1か所ずつ直径0.3cmの半円孔がある。長さ13.3cm、幅3.8cm、厚さ0.4cm。板目。SD20381出土。

組み合わせ部材は両端を柄状に作り出す。中央は半円状にくぼむ。紐ずれ等の痕跡か。横断面の形態はカマボコ状を呈する。長さ23.3cm、幅3.7cm、厚さ2.2cm。NR20383出土。

石製品 砥石が1点出土した。長さ17.0cm、幅6.6cm、厚さ2.9cm。表面と一側面に使用による摩耗が見られ、表面には擦痕も残る。泥岩製。SD20381出土。(浦 蓉子)

獣骨類 湿地および流路SD20381からシカ科の橈骨、自

然流路NR20383からウシの踵骨が出土した。シカ科の橈骨は、完存で近位端・遠位端ともに癒合が完了している。橈骨の全長(GL)は181.69mmとニホンジカよりも小形であるため、シカ科に同定した。(山崎 健)

5 まとめ

第646次調査では、奈良時代に、南に向かって下がる旧地形を埋め立て、東西方向の素掘溝を掘削している状況を確認した。周辺の調査と同様、柱穴などの遺構は確認できず、調査区周辺は平城宮内ではあるものの活発な土地利用がおこなわれなかった区画である可能性がさらに強くなった。

隣接する第642次調査で検出した東西溝SD20311の北肩は、今回検出した東西溝SD20321の北肩よりも1.5～2m南に位置する。遺構検出面の標高差や後世の攪乱を考慮に入れても、なお無視しがたい差であり、両者の関係については、今後の検討課題である。

第652次調査では、調査区の大半で近世以降の湿地および流路SD20381、自然流路NR20383を検出した。これらは第164-21次の上層、第174-17次で検出した近世～近代の溝と一連のものである可能性が指摘できる。しかし、第164-21次の下層で検出した奈良時代の東西溝は確認できなかった。本調査地においても本来は存在していたが、SD20381やNR20383により削平されたと考えられる。

一方、SD20381の堆積の様子や木杭列群を検出したことから、近世以降の水田拡大の実態を知る資料を得た。また、調査区の西北部で流路の岸を検出したことから、調査区より北側では奈良時代の整地土や遺構が遺存している可能性が高いと思われるため、今後の調査成果に期待したい。(桑田・高野)

註

- 1) 平城No.14は2013年に滅失。
- 2) 神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器皿の編年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』学報第97冊、2018。
- 3) 前掲註1。
- 4) 「五ヶ村図」(1724年)より(奈良国立文化財研究所『平城宮北辺地域発掘調査報告書』、1981)